

---

# アニメ転生『ギルティクラウン』

雨月 夜葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アニメ転生『ギルティクラウン』

### 【コード】

N9946Y

### 【作者名】

雨月 夜葉

### 【あらすじ】

アニメのギルティクラウンの世界に転生した主人公が頑張ってる話

チート仕様です。

## 転生の前（前書き）

テスト期間だけど関係ねえギルクラ初投稿です。

## 転生の前

僕は、ギルティクラウンを見て思った。

何が起きても動じない心が欲しかった。

だが僕は、あまりにも平凡である。事故から家族を守れなかった人間……

何故、自分は、動かなかつただらうか？

一つ下の妹は、助かつた僕に「助けて」と言った。僕は、ただ音を拾わぬように耳を手で覆った。

聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！！！！

誰でもいい誰でもいいから僕をたすけてよ！

ただふさぎ込む。

守れない思いだけじゃ守れない

夢に出てくるんだ。妹が僕に『嘘つき』と血を流し語る姿を見て僕は、再び耳を閉じる。

その男の名前は、『ユーリ』ただそれだけ…家族は、いないいや、

殺してしまった。

死のう…死ねば楽になるはずだ。

自分で自分の首をベルトで縛った。

「グッ…エ」

変な奇声が出て気付くとベッドで泣いていた。死ぬ勇気が無い。いや、死にたくない。

PPPPPPPP!

メールがケータイに入った。普段見ないケータイをたまたま開くと

『ワシに会って見よ。世界が変わるはずだ。君には、新しい器が必要だね。』

「ハッ！此処は、いつたい？」

「気付いたかね。ワシは、君達で言う神様じゃ」

「……………」

神様…信じられない普通ならだがこの空間自体ありえない。これは、充分神様と言う証明になっている。

「神様がこんな人殺しになんのようですか？」

「君の家族に頼まれてな…君を救ってくれと」

思わずポロと涙が溢れた。

「ははっ…自分の心配しろよな。本当にお人よしなんだからさあ…」

「君は、転生をするんだよ。別世界にね。君の世界で『ギルティクラウン』と呼ばれる世界にね」

「ギルティクラウン！！まじか！」

あの友達を武器に戦う青年と歌う少女が戦う世界か？

「うむ。そうじゃ」

「でも俺絶対死ぬよな。あんな戦闘してたらいつの間にか死んでそう」

「大丈夫じゃ願いを三つ叶えよう」

三本の指を立てた神様がニッコリ笑った。神様が楽しそうだ。

「え〜っと

運動神経MAX

射撃能力MAX

世界の知識

くらいかな」

「わかったのじゃ」

「ありがとう」

神様は、微笑んだ。

「君の両親と妹さんは、いい人じゃったのう。君を愛していた。」

ユーリは、ニッコリ笑って

「最高の家族だったよ。死んでも迷惑かけちゃったな。」

その顔は、かつこよさで言えばかなりのイケメンだった。これが本当のユーリの笑顔だった。

「俺ってあつちの世界じゃどうなってんの？」

「あるマンションの一室にいるはずじゃそのうち君には、やはり困

難が訪れるはずじゃちなみに両親は、いない」

「うん……知ってる。あの家族以外に家族作る気も無い……」

「すまん」

ユーリは、首を横に降って否定した。

「いや、むしろ礼を言わないといけないんだ。」

「そろそろ始めるかのう……」

「ああ」

「最後にサービスじゃ。欲しい銃は、在るかのう？」

原作知識と世界の知識があるはずじゃ無かったっけ？

「メイドインゴッドって奴じゃ。」

「なるほど……口径がかなり大きく連射できる拳銃でお願いします。」

「ほい」

ガシャンと音を立てて地面に拳銃が落ちた。

シルバーのメッキに二つの翼が掘られたマークの銃で銃口は、かなり大きく自動拳銃だ。手にしっくりと来る。

「名前は、『天誅』かな？」



「安易じゃな」

「いいじゃないですか!」

「ちなみに銃の威力は、一発でビルが吹き飛ぶ。」

「ぶっ!」

「まあ気にせず転生の儀式に入る。」

ギギギギツ!バン!

古い扉を開けたような鈍い音が響き

ユーリの転生は、終了した。

転生の前（後書き）

いのり 声良い

最初からテロ組織(前書き)

ねみい〜い

## ■最初からテロ組織

「んっ？」

どうやら無事に付いたようだ。凄く身体が軽い。

気付くと綺麗な白いベッドで寝ていた。

外の街中には、戦車やらなんやらと普通なら見れない兵器があった。

「遂に来たか。ギルティクラウンに」

脳みそに気持ち悪いくらい知識が入っていて気持ち悪い

「んっ何で頭に包帯？んっ何か変な記憶がある？」

ガチャ！

玄関の扉が開いた音がして反射的に『天誅』を向けた。

その人物は、

「いのり？」

「ん？どうしたの……………ユーリ？」

原作のヒロインの『いのり』だった。

「何でどうして？俺って何だ？」

「ユーリは、……………覚えてないの…？」

いのりは、少し悲しい顔をした。

「ユーリは、……………葬儀社の一人だよ？」

葬儀社って

いのりとかガイとかがいる。あのテロ組織に分類される組織の事か？  
？どうなってんだ。

ん？と悩んでいると「大丈夫？」と顔がくつつきそうなくらい近づいてきた。

「……………」

ユーリは、見とれていた。いのりの肌は、雪のように白く凄く顔が綺麗だった。

そして原作通りの服装がまた男の目には、かなり毒である。

「うわっ！」と思わずカエルのように飛んでしまった。

「いつも言ってるだる服装は、露出少なくしろ…』いつも?』」

「ユーリは、……………記憶喪失?」

「たぶん…?」

これは、何だ? 転生と言うより憑依に近い状態じゃないか? どうして葬儀社にいるかさっぱりわからない。

何でだろうか?

「ガイに…連絡する。」

いのりは、あの原作で見たケータイのような物を取り出した。

「いのり待って!」

いのりは、こつちを向いて「何で」と言った。

「今って凄く大切な時期だったりするだろ? 何となくわかるんだ。だから心配かけたくない。だから二人の内緒にしてくれないか?」

「ユーリは、……………ガイの次に偉い……………」

「まじかよ……………」

「じゃあガイにだけなら」

「…わかった」

ケータイのような物がV字になりそこから空中ディスプレイが現れる。

『どうしたいのり?』

そこには、原作通りのガイの姿があった。  
葬儀社の制服?のような物を着てディスプレイを見ていた。

「実は、……ユーリが記憶喪失してるの。」

「!…本当か?」

原作では、見せない顔をガイは、していた。

「今そこにユーリは、いるか?」

一瞬で元の表情に戻りガイは、ユーリの居場所を聞いた。

「ここに居るよ。」

いのりがV字のケータイ機器受け取り自分の前に持ってきた。

「……………」

「……………」

なんと話していいのやらわからなくなり「俺ってだれですか?」と聞いた。

ガイは、額に手を置いて

「ホントにユーリは、いのりには、甘いな」

「???」

さっぱり意味がわからなかった。

何故そこでいのりの名前が出てきた。

「お前の怪我の原因は、いのりを庇って撃たれた事だ…」

「それは、いけないこと?」

思わず聞いてしまった。

「昔から言っているが自分の価値を間違えるな」

「命は、平等だと俺は、思う」

ガイは、溜息をついて「ユーリは、記憶喪失してるのか?」と聞いてきた。

「…たぶん」

「明日でいいから一度、葬儀社に戻ってこい」



「了々解っ」

「ふん。記憶を無くしても返事は、変わらない」

ブツンといい音がしてケータイがしまった。

「……………怒ってる？」

「んっ何を？」

いのりが何故落ち込んでいるかさっぱりわからない。

「私の…ミスで記憶を無くしたこと…」

「……………さあ？」

味気なく返した。何も考えず返したわけじゃない。ただ俺は、忘れた。と言った。

「うん…ありがとう」

「さあなんの事？」

「ハア、俺は、なにやってんだろっ」

転生一発めから厄介な事になった。

「ユーリ…お腹減った。」

グキョ〜！と女の子らしくない大きさの音に思わず微笑んだ。

「何か作るよ」

「うん……」

リビングの冷蔵庫には、米とちよつとの具材程度だった。

「おにぎりかな…いのり手伝える。」

「教えて…」

「わかった。まず水を手につけて拳大の量の米をとって塩掛けながら具を入れて完成。」

「熱っ…」

そりゃあ炊きたてですから…赤くなってる。

「ちゃんと水を付けて握らないと火傷するからね」

いのりの手を引いて水道水を火傷した指に出した。

何とか二十個くらいのおにぎりを作りほとんどいのり食べた。

「寝室に戻るから何かあったら呼んでな。」

「んっ…わかったお休み」

「ほい。お休み」

寝室に入りまだ眠かったのかクラツと眠気が現れた。

明日から忙しくなりそうだ。

現在6時になりユーリは、目を覚ました。

んっ何かやわらかい

「んっ…」

と妙に艶やかな声が聞こえた。

何か妙に嫌な予感がして変に盛り上がった部分の布団をめくると

「なっとななな！」

予想通りだがいのりが布団にいた。

「あつ…ユーリおはよう」

「……………」

いやいや何でこんな俺の隣で寝るんだろうか？原作では、ガイにベ  
タバタだったはずだ。

「今日…葬儀社行かないと…」

ハア〜現実逃避は、止めよう頭が痛くなる。  
いのりは、そのまま外に行こうとしていた。

「いのり寝癖くらい直せ」

「大丈夫」

「いや、全然ダメだから」

いのりの髪の毛を解かしいろいろ加えて完成だ。

「よし行くか」

「付いてきて」

いのりは、路地から道に入り『汚染区域侵入禁止』と描いた看板付  
きのロープを潜り死人のような目をした人間がいた。

「待ち合わせは、広場だからここなはず…」

「おいお二人さん」

「キャハハハナンパだナンパ」

「さっさとやるうぜ」

三人の不潔な男が口々に何か言っていた。

ユーリは、思った。肩慣らし程度にはなると考えた。

始めは、神様から貰った運動神経MAXを試す。

足に地面を食い込ませ地面を蹴るといつの間にか真横にいた。既に人外である速度だった。

驚いたのは、汚い男の他にいのりもかなり驚いていた。

とりあえず頬に拳を軽く当てた。それだけで大分後ろにある壁にぶつかっていた。

「兄貴！」

子分が叫ぶがユーリは、無情にも既に拳を振り上げていた。

「もう一人どうする？」

殺意を含んだ微笑みをする。腰を砕かせながら逃げて行った。

「ユーリ…強くなって…ない？」

「前の自分がどれだけ強いかわからねーし」

パツパツパツパツ！

眩しいライトがユーリといのりを照らした。

「よく帰ってきたなユーリ」

「まあ帰ってきたよ。ガイ」

オオツ！！

と男達は、吠え上がった。

「よく帰ってきたな！！」

「怪我ねえか？」

「ぼーっとしてどうしたんだ？」

あまりの感激ぶりに固まってしまった。

「二人は、休め」

ガイは、短く言った。明らかボロが出そうだった。

■最初からテロ組織（後書き）

ボタンツキユ）

始まり（前書き）

疲れた（、）



## 始まり

燃え盛る建物が体のアドレナリンを促進させる。何とも恐ろしい光景だった。

一個人の人間が兵器に勝利すると言う結果が彼の強さを証明していた。

度重なる戦闘でコートは、黒く刀は、どす黒い色をしている。建物は、炭化して当たりには、鉄屑が散っていた。日本刀【黒燕】は、鉄を斬ることも容易く切り裂く可能にしていた。今日の空は、朱い真っ赤だ。

遠くからモーターの回る音とローラーの回転の音がした。

バンツ！

巨大な鉛玉が発射される音がした。それは、反射的に出された刀に切り裂かれたが次は、三発のミサイルが飛来してきた。バックステップで一つのミサイルを回避して二つのミサイルを日本刀で真っ二つにする。

『なっ！?』

謎の音声が流れて驚いているのが分かる。何か聞いた事のある声の気がした。一瞬風が強くなりフードが脱げる。

『……………』

急に大人しくなりゆっくり銃口を下ろした。

『貴方……リヨウ？』

「んっアヤセか？」

『生きてたの！？』

「話は、後だ…来るぞ！！」

ギャリリリリ！

鉄の擦れる音を出しながら敵の機体がアヤセ機体に突撃する。

『っっ！』

この機体は、ダイレクトで搭乗者と繋がっていて機体に損傷があると搭乗者もダメージを受けるシステムらしい学校で習った。

俺は、アヤセの機体を踏み台に弱点と思われる頭部のコードを刀で斬った。人間にしたら首の頸動脈である場所を無情に切り裂いた。

茶色やら黒やらの液体ががコードから溢れ出し搭乗者の悲鳴を残して機能を停止した。

『ありがとう次行かないと…』

「機体の損傷が多すぎる。撤退しろ」

『でも！』

「冷静な判断をしる。今の状態で機体を壊すわけには、行かないだろ？」

『……………分かった。撤退する。』

「その前にいのりが近くに居るはず何だが見てないか？」

「いのり？分かったツグミに伝えとく」

アヤセの機体を見送り次の軍隊の密集地区に走った。

Sideアヤセ

一年前に彼は、死んだはずだった。細胞兵器の奪取のデータ集めの時に単独潜入でデータを送ったのち死亡。とツグミのハッキングで判明していた。GHQの高いレベルの機密『ボイドゲノム』と呼ばれる兵器の時だ。

彼は、優しい。それは、葬儀社で一番と言って言いくらいのお人よしだった。一年前だって任務の日にもいつも通り笑っていたがたまに寂しそうな表情をしていた。だが部屋で盗み見た彼は、人間なのかわからないくらい怖かった。刀と言うアンティークと呼ばれるくらい古い刃物を使う少年。「頼むよ母さん……」この言葉に少なからず私は、驚いた。彼の弱った姿を見るのは、初めてだからだ。

彼だって死にたくないだろう……………

そして次の日に彼は、居なかった。  
それから一年が立ち私は、この子（機密）を使って戦場を駆け回った。そして出願許可が出て何時間立ったかわからなくなった頃に黒い格好の人が現れた。

腰には、刀。様子見に銃を一発撃つと避けることをせずに弾丸を切り裂いた。

「くらえっ！」

背後のミサイルを展開して三発のミサイルを放った。それをバックステップで避けると刀を使いミサイルを切り裂いていた。

私は、驚いて声が出た。すると黒いフードが外れて素顔が現れた。その人は、誰よりも優しく誰よりも強い少年だった。

S i d e O u t

S i d e シュウ

葬儀社に行つて事情を話していると「敵襲だ！」全員が銃を持ち応戦に行く。

何も出来ない…どうすればいいんだ。やれることは、「シュウ！！今度こそ守って見せる！」

そつだ。やらないと変わらない。『自分らしくないことをやるんだ』僕は、走り出した。

S i d e O u t

S i d e いのり

いのりの車は、ミサイルの直撃でひっくり返っていた。運が良いの  
だろう手の拘束具を外して目隠しを取ると真っ赤な空が彼女を照ら  
していた。

全体を見渡す為に瓦礫を上ると

二体の人型の機体があった。二体の機体の一体が気づいた。

カチャ

銃口がこちらを向いて引き金に指が掛かると

「いのり……」

そこにリョウが来た。今、会いたかった人が走って来る。

間に合わない。どちらかが死ぬ。死ぬなら立場的には、わたしだ。  
だが彼は、私を庇った。何年立っても変わらない。

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

始まり(後書き)

頑張る( )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9946y/>

---

アニメ転生『ギルティクラウン』

2011年12月1日20時54分発行